シベリア曠野に咲く花（其五）

（表　紙）

シベリア曠野に咲く花（其五）

昭和二十二年八月五日
舞鶴上陸地支局
復員調査班

（表紙裏）

本資料は昭和二十二年七月二十二日舞鶴に上陸せる恵山丸復員者より集めた美談である

配布先
第一復員局　留守業務局（鮮満残務整理部）
中部復員連絡局管下復員官署
東部　西部　北部　復員連絡局
函館　佐世保　上陸地支局
舞鶴引揚援護局　舞鶴上陸地連絡所

一、〈大阪府〉○○○○○○○○○○○○○○○○○○○　兵長　○○○○

打續く激しい勞働に、兵は疲れて日々の空腹を訴ふる外、兎もすれば理性を失ひ勝ちの中央亜細亜、嚴冬の時、一片の布片すら貴重視される環境にあり乍ら、一人の正直な兵隊は日本人の面目を充分にあげてくれた。即ち△△衛生兵長は、ソ連將校の厠に忘れある時計を拾ひ、直ちにソ連日直に届けたのである。之は極めて普通の如く見えるが、其の当時としては中々出来難い行爲であった。ソ連日直は大変喜び、朝礼の時全員に「皆斯くの如くあって呉れ」と非常に賞讃し、やがて我々に対する信用も増して待遇が一段と向上した。その△△兵長は今も直眞面目に一生懸命働いてゐる。

二、熊本縣○○○○○○○○○○○　上等兵　○○○○

私は不幸にも病気の爲、スーチャンの病気へ入院致しましたが、病気軽恢すると其の病院で軍醫の助手として、患者診療に從事することになりました。丁度私が勤務して居た病棟に、衛生兵として勤務して居た△△△と云ふ兵隊が居ました。この人もやはり患者として入院した人なのです。△△君は勤務狀態、非常に良く、患者間でも非常に人気がありました。△△君の受持の病室へ、一人非常に重体な腸チフス患者が入院して来ました。△△君はこの重患を受持つや、寢食を忘れ実に親兄弟も及ばぬ看護振りでした。患者は食事も自力で出来ないので、△△君は食事をスプーンで患者の口の中へ入れてやり、患者の食事が終ってから自分の室（衛生兵室）へ帰って、食事もそこそこに食事後の煙草も喫はず、患者の枕邊にかけよって□□□した。患者は粘血便の回数多く、其の度に便器を臀に受け、綺麗に洗ひ消毒して、一度でも嫌な顔をした事もなく、患者に優しい声をかけ、「一日も早く元気になって内地に帰りませう」等と云って居ました。晝夜分たぬ重患の看護に、△△君も心身共に疲れて来て、△△君の方が食慾がなくなって来ました。それでも△△君は、夜は患者の隣寢台に寢て、「若し自分が夜間目が覺めなかったら困るから、何時でも用事の時はこの紐を引いて呉れ」と患者の□元へ自分の手を結んだ紐の端を置いて寢ると云ふ看護ぶりでした。軍医官や私達も「△△君無理せずに暫く休んで他の衛生兵に看護を依頼したらどうかね」と何回となく奬めましたが、△△君は「いやあの患者は絶対自分が元気にさせてやりたいのです」と云って聞き入れませんでした。△△君の誠意天に通じてか、腸出血までした流石の重患も次第次第に恢方に向って行きましたのに反し、△△君は或日熱が出たと云ふので、軍医官の診断を乞ひましたら、腸チフスと診断、時を移さず元気な勤務者の血液を輸血迫しましたが、其病迫漸次悪化の一途を辿るのみで、遂に薬石効無く発病十日余りで永眠致しました。△△君の看護した重患は、其後二十日位で元気になったのでありまして、重患を助け、己が逝った崇高な△△君には、思はず頭が下るのであります。

三、〈新潟県〉○○○○○○○○○○　軍曹　○○○

吾人が終戦と同時にシベリヤに送られ、苦役に從事せる時、不自由を感じた事は食料難、言語の不可解、医療設備の不十分等であった。此の時に於て、千島松輪

島野戦病院内科△△氏の活躍は目覺しく、吾人全員より文字通と、救ひの神として尊ばれたのである。氏は、四六時中、言語の通じたソ連側と吾人との中間に在って、患者に対しては全く親切丁寧を極め、治療の大半以上を氏自ら行ひ、ソ連側が五人患者を作業に從事させやうとしても之に應ぜず、又日々の作業を行ふ爲、朝収容所の門を通過するときは、晴雨降雪に関はらず必ず門に在って一々吾人の血色、動作を注視し、縱令本人が意識せずとも異迫有りと認むるや、直ちにソ連側に交渉して本人を休養手当する等、飽く迄患者保護の任に当られた。至誠天に通じたのか、遂にソ連側よりも絶大な信用を博するに至り、現在尚活躍して居られる。

四、東京都○○○○○○○○○○○○○　○○○○○方
衛生軍曹　○○○○○

敗戦の二字を深く刻み込まれた軍隊を乗セ、輸送列車はソ連の炭礦町に到着致しました。鉄條網を二重に張り廻らしたバラック建輸送船の船槽と同じ造りの二重寝台に鮨詰めにされて一夜が明けた。忘れもしない昭和二十年十月七日、この日より俘虜としての収容所生活が始まり、□□□作業は炭鉱作業で、ソ連人でも囚人のやる重労働でした。作業の継續は、疲労に依る体位低下を招来し、加ふるに不衛生なる起居、虱撲滅法もその功を奉セず、遂に発疹チフスの発生を見、収容所全般に擴がり、四十名中二十名近くの羅病者（内死亡者四百余名）を出して作業は中止になりましたが、なる医療施設の爲、救護員の奮斗も空しく犠牲者は日毎に増加するのみでした。

其の頃、△△衛生兵は入隊前研究して居た薬学の力によって、同胞を救ふべく意を決して、小さな一室にて注射薬の製造を始めました。器具とて何もなく、瓶の底を切って漏斗を作り、水筒にゴム管を連結して蒸溜水を取り、滅菌には飯盒を使用すると云った有様でしたが、注射液の製造は、△△君の苦心と努力に依って非常な好成績を揚げた爲に、難百と云ふ生命が助かって行きました。然し、△△君も不幸病魔に襲はれて入室してしまひましたが、同室の戦友の苦しみを見ると、彼の責任感に燃える心は自己の苦痛も忘れ、軍医の目を盗んで薬の調合をしているのを時々見受けました。縁の下の力持として働く△△君は、温順な責任感の塊の様な感じのする人で、上には非常に信頼され、下からは常に尊敬されて居ります。因みに△△△△君は、鹿児島縣△△△の産、日大文科卒□、衛生上等兵、三十六才、現在チエレンホウヴオ地区にて、元気よく勤務中であります。

五、山口縣○○○○○○○○○　一等兵　○○○○

炭田の真中に所在する私達の収容所は、地上作業三〇％、地下炭礦作業を七〇％収容人員の大半は炭礦に入って先山で採炭し、坑木材を運搬したり、又はペトン作業に、配車配電作業に從事したものです。或日は炭礦二番方と云って、午後四時より十二時迄の八時間作業で引續く体力の消耗と、夏期に於ける食慾不振とから来る身体のダルサを押して作業に入坑しました。丁度私達のグループは其の炭礦でも主力を以て聞へる坑道でした。勿論、先山でショベルを振ふ私達は、危險を冒しての重勞でした。こゝの先山は二、三日前より落盤甚しく、目の前に炭盤が落下して来る事屢々でした。私達の班長は、其の日も部下を充分勞はり乍ら、注意を与へて現場廻りをして居たのでありますが、午後九時頃、同僚が腹痛の爲と「ガス」の爲倒れたのであります。我々日本人として一旦やりかゝった仕事を、ソ連人の前で作業％を今日に限って落す事は面子もあるし、班長の責任上、自然彼に替って、落盤下の千山にショベルを取って交替したのですが、運悪く作業四〇分で班長は落盤の爲、頭部に重傷を負ひ、気絶したのです。これを目撃した私達は勿論の事ですが、交替してもらった彼の心中は、言葉には出セない苦しさが込み上げて来たものと推察出来ます。班長は早速入院、加療したがなかなかの重傷でした。彼に勿論、作業に出る時ヘトヘトに疲労して真夜中に帰って来た時も、班長の容体を心配する余り、暇さへあれば見舞ったものです。私達は入坑すると、今は坑道で通路になってゐる班長負傷の処を通る時、揃って「班長今日も元気でやります」と云ひ、帰る時、又「班長作業終了です。御苦労様。」と云って、班長負傷前、坑内で取り交わした言葉を、班長が目の前に居る如く、縱令その姿はなくとも、皆の心中は少しも変りませんでした。入院してゐる班長も亦、誰々は良く腹が減ると云って居たからこのパンをやって呉れと、自分の食べるパンを届けてやる此処屢々でした。四ケ月経過して、班長も全快退院して来ました。退院直後なれば、体位三級として軽作業に□るのが定石ですが、班長は我々の居る坑道に特別希望して入坑作業に從事しました。彼や私達の喜びは一方ならず、班長も「俺もこれで□愉快に皆と笑って働ける」と実に嬉しそうでした。

六、福島縣○○○○○○○○○○○　軍曹　○○○

酷寒零下六〇度、遠くカザツクスタン共和国、ソ連第二の炭鉱町カラカンダに終戦後、血と汗を流し、懐かしの内地帰還を夢に見て、日々苦労艱難に耐え戦ひ續

けて□る旧関東軍将兵の間には、幾多の涙ぐま□□美談が秘められて居ります。私の中隊長は陸士第五十四期（岡山県出身）の△△大尉と云ふ方でありました。この方は、軍隊當時より非常に部下を可愛がり、且人物の出来た人で、我々を遠くソ連に連れて来た事に対し、到着當時五日も食も攝らず一室に籠って考へられた程でした。或吹雪の日、疲れ果てた兵隊の姿に涙ぐんでゐた△△大尉の所に収容所長が怒めしく入って来まして「今から全員使役に出セ」と命じました。中隊長は何思いけん。どかりと床の上に胡坐をかき、ぐっと頭を上げ、収容所長を見付める眼の鋭どき。その凄さに流石の所長も二、三歩後へ下る。通訳を通じ「使役を出すなら、この△△の首を斬ってからにして下さい」とポンと首を叩く。余りの度胸のよさに所長も「承知々々」とスタスタ室を出て行きました。何と云ふ温かさでありませう。自分一人で皆が助かるならと云ふ心、唯々感激の極みであります。

シベリヤ曠野に咲く花（其九）

（表　紙）

シベリヤ曠野に咲く花（其九）

昭和二十二年九月二十五日
中部復員連絡局

（表紙裏）

〔八月二十九日〕
〔九月二日〕

一、本資料は昭和二十二年九月六日舞鶴に上陸せる遠州丸復員者より集めた美談である
〔米山丸〕
〔高砂丸〕

二、配布先
全復員関係官署

〈第一話〉新潟縣△△△△△△△△△　軍曹　△△△△

二ケ年間の抑留生活を通じ、我々を一番樂しませるのわ、一日の作業を終っての夜だった。一日として忘すれる事の出来ない故郷の父母妻子親兄弟の夢も結び、一日の疲れをなほすかと思ふと、又我々の一番いやに感じるのは、やはり○下四十度も有る冬の朝作業製列の鐘だった。然し、此の鐘のなるかならぬかに毎朝一番先に製列する一人が居た。之は、新潟縣△△出身、元陸軍曹長○○（ママ）と云った。年は四十才を越して居り、我々は親爺と云って居たが、収容所一五○○名も此の親爺の眞似は仲々若き者も出来なかった。

ある冬の朝、今日も相変らず○下四十度も有るのに一番先に製列し、不言毎々行、組員への製列を督勵して居た。此の様な寒い日に、我々は一番注意せねばならぬのは凍傷予防である。親爺も何時もの様に朝から注意をあたって居たが、運悪く

一人の患□□□しまった。大した程ではないが、足の指が二本ばかり白□なり其の日は作業をやすんで居たが、夜帰ると診断を受けると、作業指揮者として責任を問はれ、親爺は三日間の営倉を命ぜられ、体の暖まるひまもなく入倉した。組員も一人の不注意の爲に親爺を入倉せしめる事は残念がったが、どうする事も出来ないかった。不言の親爺は、患者をうらむ事なく、自分の悪かった事を組員にわびた時こそ、一同の胸はこみ上げて来た。之、十二月三十一日の事で、懐しの故郷では楽しい年越の夜であるのに、親爺は氷る様な入倉の一夜を送って来たが、何一つぐちを云ふ事なく、昼の作業に出て組員を督励した。こうした昼は作業、夜は入倉生活を續ける親爺の顔色も悪くなって来たが何一つ云はず、作業より帰ると「では行って来るから火の元を注意してくれ」と云ひ出て行く親爺に「御苦労様です」と云ふ言葉より何もなかった。三日目の作業より帰るや、親爺は四十度の熱発で入室したが、尚も心配するのは上言にも凍傷になった患者の心配と、組員の作業成績向上に一念して居た。今尚、自分は当時を感じる時に、親爺の顔が前に浮んで来、又全國民の一人々がお互に不言実行、悪い事迄自分でその責を負う誠心が有ったならば、団体□活も明るく、又新日本建設に大切で有ると想ふ。

〈第二話〉新潟縣〇〇〇〇〇〇〇〇　軍曹　〇〇〇

私は鉄道作業小隊に勤務して居り、長くペケヤス生活をして居りましたので、各収容所のニュース知人の口達を聞く事が毎日の様に有りました。ムリー地區第二百二十三収容所給與係、△△さんの美談を申し上げて見たいと思ます。

各収容所で一番問題となった事は、給與と私は思います。横流れ、二人食、友人には多くやる等、種々な事が有りましたが、同収容所には△△さん□□與係は竹を割る様な清心の爲、一人として問題を起す様な事は有□ませんでした。本年一月中旬頃と思いますが、砂糖の配給が有り□した。どうしたのでせうか。最後に二名分現品が無くなってしまったのです。△△さんは非常に心配され、所長に御話をしました所、ロスの事ですから受付てはくれません。△△さんは自分の外套單衣の二着を持出し、食糧配給所に行き、なれぬロシヤ語で訳を話し、外套單衣の二点と砂糖と取替てくれと申出られたのです。配給所長は△△さんの手をにぎり、日本人は立派な清心で有る、外套も單衣も取らず砂糖を二名分くれたそうです。是を聞いた収容所員一同は、涙を流して△△さんに感謝致しました。△△さんは元□□□に、□□□□□□□□□□□□□居ります。住所は、樺太出身と聞いて居ります。

〈第三話〉三重縣〇〇〇〇〇〇〇〇　伍長　〇〇〇

私は抑留中不幸にして、一九四六年九月末、黄疸病にかゝり、同月二十八日、ムリー地區第一病院（ソ聯名稱三〇九九野戦病院）に入院、間もなく全快。頂度、今復員迄病院に於て勤務して来ました。病院に於ては、日本の様に設備竝に薬とも不足勝でした。その為、死亡者は續出の有様でした。其の困難な中に於て、日本人軍医、元丸大病院にて應召され□△△△△少尉の本當に獻身的な軍医振りに対し、感謝しました。色々と美しい光景は有りましたが、特に感心致しました例を一つ記します。それは今年の二月の初旬頃でした。〇下三十五度以上の酷寒地の作業の爲、熱発患者は續出し、毎日毎日収容所よりの入院者は二〇人、三〇人と云ふ有様でした。そして、病棟（室）は此等患者の死亡恐怖症とも申そうか、気違じみてわめきが續きました。其の中に有りて彼の△△さんは本當の不眠不休の看護が續けられました。本人も唯の目に見ても非常に体を害されました事が見受けられたにもかゝわらず、外の衛生部員の体までわと忠告にも耳をかたむけず、只我等同胞の爲、自分の身を犠牲として盡されました。たまたま△△さんも自分で体温三十九度と云ふ熱におかされ休んで居られましたが、亦入院患者と云ふ知らせを聞き、他の者の止めるのもきかずあの深い雪の中を、酷寒の中を、責任否、我等同胞を一人でも殺してはならないと一秒と言へ共、早く注射せなければと、眞の雪灯の細い通路をこけては、起きてはすべり、かけつけられ、診療にあたられました。此の外、例は私が目激しただけでも何回となく有ります。之を要するに彼の地にて唯もが樂しく少しでも美しい物を食べて居りたい時に、自分の身をもかまわず同胞の爲に盡されました事は△△さんの本当に偉い方だと感激致しました。

〈第四話〉埼玉縣〇〇〇〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇

周圍でよもやもの雑談がしきりと取り交されてゐる。私は余りにも心境の一変した彼等の態度に驚く前に、私は二年間に無んなんとする死い生活を通じ、眞の日本人たるの面目を失はず、今日迄生き抜いた勝利の快感に酔うてゐる。斯る信念が何に依って培はれたが、其れを書き綴り度いと思ふ。私が最終収容所たる五百十三管區第二収容所に轉属したのは、昨年十一月でした。当時、新設した許りの収容所は、所謂嫌はれ者同志の集りで、毎度喧々囂々たる所内の無統制さに、私は「えらい所へ来たものだ」と呟いた事も再三ならずだった。当時の初代大隊長

△△中尉は、斯る無頼漢にも等しい者の集ひを一歩々確実に自己の掌握下に収めて行かれ、所内の設備も我々兵隊の統制と平行するが如く完備され、我々の顔色は日増に生々として来た。然し、それに反し隊長の小肥りの體躯は、次第次第に痩せていった。語らざるその心労は、実に吾々の想像に犯すものが有ったと推察されます。毎夜再三ならず所内の巡察をし、毛布をはゞいてゐる者の毛布となほし、深更に及ぶ迄、麻雀等に遊び耽ける者には注意を與える。その姿を時折見かけて、吾々は感謝の念で一杯でした。又吾々がソ連側と悶苦を起したり、又事故を起して、少しでも精神に緊張を欠く点があると、直ぐ全員集合の上「お前達は如何なる場合にも日本人たるの面目を失うな。其責任は俺の命をかけてももつ」と言われ、対ソ交渉に一身の犠牲をも省りみず当られた。此の誠意が何で兵隊の良心を甦かえさずに置きませう。隊長の意図は、直に兵隊の心に映り、眞の日本人たるの集団は次第に完成されていった。今は、ウラヂオの数ある収容所に於いて、隊長の顔を見て自すと上る兵の手の敬礼、斯る情景は我が収容所以外に絶対にないと思ふ。然し△△中尉も遂に我々と別れる時が来た。其れは自己の思想と相容れざる主義をこの収容所に入れる事を頑強に拒み通し、彼等の策に依ってスウチヤン地區の將校大隊へ送られました。然し、去る当って、隊長は腹心の者に「俺は形の上では彼に負けた。だが彼は「自分は内地に帰り度くない。帰るとアメリカの官憲が怖い」と。だから彼の恐怖をいだいた信念と、たとへ銃口を擬せられても信念を飜さざる信念を持つ俺とでは絶体に俺の勝だといはれたさうです。吾々が決を以て隊長と別れて以来、△△中尉の意図を固く胸に秘め、新大隊長の下に最近漸く出来上った民国同志会の行き方を厳正に批判して居ります。最近特に自覚した極く少数の人では有りますが、眞の民主主義に立脚し、日本人たる節操に磨かれて更に飛躍した段階に迄、到達した人が現はれたのを見て、非常に心強く感じて居ります。私は今だ胸中に愛をこめた隊長の声□□を常に身近に感じ、さらに強固なる信念を培い祖国再建の途を歩みたいと考えて居ります。

〈第五話〉長崎縣○○○○○○○○○○　兵長　○○○○

コムソモリスク第八収容所大隊長見習士官△△△△氏(28)（長崎縣△△△△△△△△△△出身）は、自らを犠牲にして部下同胞のために奮斗し、蘇聯側と斗争、幾度か營倉に入れられたるも、猶ほ屈せず、我々を護り続けて呉れた。ソ聯側の怒りに觸れ反動將校の名の下に、今年三月、コムソモリスク第十一収容所に転送された。早期帰還を祈る。

〈第六話〉長崎縣○○○○○○○○○○　兵長　○○○○

コムソモリスク第八収容所第一中隊第二小隊長見習士官△△△氏(26)（福岡縣△△△△△△△△△△出身）は、部下同胞を、自ら蘇聯の歩哨作業監督等から殴打され、又は營倉処分を受け乍らも死守愛護して呉れた。我々の一大恩人である。あの小隊長あればこそ部下同□今日生命を持続し、帰還の日を待つことが出来るのである。

〈第七話〉福井縣○○○○○○○○○○○○○　兵長　○○○○

ムリ地区第二十収容所陸軍一等兵△△△△△△氏(37)（北海道△△△△△△△△△△△出身）は、捕虜生活に入っても依然として荒むことなく、飽まで日本人としての良心的な行動に終始し、作業に内務に模範として衆の信望越一身に蒐め、今春遂に分隊長に推挙された。余りの奮斗に最近健康を害し、ムリ地区の病院に入院せり。一日も速に帰還する様念願して止まない。

〈第八話〉東京都○○○○○○○○○○○○　伍長　○○○

衛生部苦心談

我等戦友の合言葉「帰る日迄」幾多の苦勞も内地の土を踏む迄は生き永らへなくてはならぬと、細くやせた体をお互に元気付けて日本人の気力を持って勞働作業、その他の勤務、雑役、牧畜、農耕等に働いて来た。これに答へて医務室勤務者の苦心談を記す。

ロスケには日本の様に十分な医療品も無い。又補充もして呉れぬ爲、軍医はじめ衛生兵の苦心は、言筆などでつくせるものでは無い。軍医は自分の私物品の時計、服等をロスケ乃地方人に賣り、薬を買入れ、又代用品として白樺黒焼粉、又炊事で捨てる牛の骨羊の骨を焼いて骨粉を造り、此等を患者に与へて居る。その他も色々と代用薬物、代用治療器械、消耗品の考案に苦心をつゞけて居る。衛生下士官兵も不充分な器械消耗品で患者の看護に勤めて居る。器械消耗品の不足を熱と生氣とで補った。特に休養室勤務の▽▽伍長、△△上等兵は自分の身体の悪いのも顧みず、患者の爲に看護して居る。或日の出来事、▽▽伍長は三八・〇度も熱発して、その数日間ろくに睡眠をとって居ない。その前日などは一睡もして居な

い。「班長殿、今日の不寢番は小生がとります可ら休んで下さい。」「なぜ？」「班長殿は熱発して居るし食事も取ってないで無理だ。「馬鹿言ふな、お前こそ近頃顔色も悪いし、第一この四、五日ろくに寢て居ないだろ、今夜は俺可とる」□等二人の押問答の末、二人共共同で勤務する事に話可落ち付いた。

（註）この勤務者ありて生死の境に立った患者その他多数の重軽症患者が看護され又力付けられ日本再建のためと帰還する日迄と頑張って居りま須

〈第九話〉兵庫縣〇〇〇〇〇〇〇　軍曹　〇〇〇〇

数多の戰友をシベリヤの地に残して、後髪を引かるゝ思ひと故国に帰還せる生涯忘れ得ぬ大きな喜び思へば、過去二ケ年の抑留生活中、日本人として且ての隊長として將校として、この人ありてこそ吾々の苦労も悲しみも話を聞き顔を見るのみでも一時忘れ得る事の出来た尊敬の的であり、吾々の救ひの神だ、吾々のエネルギーだと兵一般の信望を一心に集め、健康そのものゝ如き人、昔日の模範將校だと仰ぎ見た▽▽▽大尉殿の日常生活の一端を美談として記し得る事ハ、自分も最大の光栄であ里ます。初代大隊長△△大尉が可転属さるゝや、軍の命に依り▽▽大尉が可大隊長とならるゝや、当時、丁度兵最大の否、総ての者の楽しみの一つである食事が％給与になった。一方では大きい「パン」を、一方では□き「パン」を手に手に、喜びと悲しみを判然見る事の出来る風景可食堂内にバラま可れた。眞自面に働けど、最高給与引受ける事の出来ぬ気の毒な者可数限りなく出現せざるを得なかった。同じシャフトに働いてロスケの機嫌取の上手なものは何時も大きな「パン」を、斯んな事が兵の心を一時暗くした時だった。▽▽大尉は何時も食堂に現はれて小さいパンに同情して「オゝご苦労腹可へるだろうこれは少い、小さいが俺の昼食のパンだ食って呉れ」或は「今夜は夕食可食へない。俺の残したもの、失礼だが食って呉れないか」「俺は遊んで居る可ら、余り腹が空かない」等と平均給与に同情して、斯うした食堂でも出来事が数へ切れぬ程くり返された。兵皆「パン」を貰ひ、残飯を貰って泣かざる越得なかった。又便所に電燈が無いので皆不便をかこつて居た時、自分の時計を賣っては電球（ソ聯では特別高価なもの）を買求めて、吾々のため點燈して呉れた。出会へば必ず「御苦労しっかり元気でやって呉れ」「お前顔色可悪いが如何したんだ。今年は帰るんだぞ。帰る日は近いんだぞ」「親兄弟妻子の事を考へて頑張れよ。苦しいだらうが今暫くだ」等、常に吾々の心を元氣付けられた事「▽▽大尉に出会へば、その日一日苦しみを忘れる事可出来る」と言ひ合ったのである。將校も兵も下士官も力無く空腹をかゝへて生きる力の盡き果てる迄に、疲労して且ての世界に誇りし日本軍人の努力心かと、身も心も共に地に墜ちかけた時、皆の心をグッと引き戻す役目を演じたのは▽▽大尉殿であった。或る時は、酷寒時零下四十五度を越える日可度々あった。そんな日に雨外套を著けて四キロもあるシャフトに通ふ兵を見付けて自らの外套を「お前は風邪を引くぞ」と着せては「躰を大事にするんだぞ」と親にも勝る心使ひ、防寒短靴の破れたのを見付けてハ自分の長靴をはかせて「凍傷になるなよ」等、又煙草がなくて困って居る者を見付けては「吸ひま□だ。廻し吸ひして呉れ」等々、数限りなき親心に兵皆泣かざるものは無かった。斯うして「吾々は日本人だゾ。日本へ帰るんだぞ。元気でやれよ」と口癖に言はれたの越、今想ひ出して胸一杯である。吾々の帰還決定するや、我事の如く喜ばれて「俺達の代りに早く躰を健康にして、再建日本のため努力して呉れ」「汽車の中で吸って呉れ、一口宛でも」と少い煙草を与へられた心。以上記した事は▽▽大尉殿の毎日の生活中の総てであった。この人あって五〇三ノ三収容所の同胞は必ず元気で勤めを果して帰還されるだらうと信じざる越得ない。▽▽大尉殿の生活の一端を記したの処に過ぎないものであります。

〈第一〇話〉靜岡縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇

約二年間の抑留生活中は、到底筆舌に盡し難い日本人同志の同じ血を肉を分ちあっての友情、親愛生活が續けられた中に、代表的とでも申しませうか、一美談として永久に私の、又此事実を知る日本人ならば忘れ去る事の出来ない沿海州一収容所の事実を浅学ながら記録させていたゞきました。それは、ムリー地區一一六収容所の隊長をして居られた△△少尉の事であります。作業基準（ノルマー）による囚人扱ひの強制作業により、我々戰友は日毎夜毎、苦しまねバならず。その上ソ連側の収容所長、経理作業官の糧秣、食料、被服（支給すべき防寒具等）の横流しにより我々戰友の幾人かが病氣に、栄養不良、失調に倒れて行った。この時、隊長△△少尉はソ側所長経理官などに嘆願、努力すれども聞入れられる筈がなかった。……

その結果、△△氏は、兵隊の身を心配して、作業場を巡回して激勵し、或日、慰め、作業の方法、裏表の取り方を考へさせて少しでも兵隊が休養出来る様に努力し、夜は宿舎に見廻り、入院不許可の病人の看護に当る等、言葉筆等に表現出来ない苦労を重ねられた。そして、最後にソ側に容れられず謀略的に微戒部隊に送られ、強制重労働に従事されて、現在も聞くところによれバ、居られる事と思ふ。罰則のため転居になられる時に兵隊に残した言葉は、永久に忘れることは出来ない。そして、収容所全員が泣いて見送ったあの時の光景。沿海洲黒滝江畔の一収

容所に咲いた日本人の花として、私は全国の方に御傳えしたい。尚、△△少尉は神奈川縣の一貧寺の出身と聞く。そして常々語って居られた言葉に「俺の母は実に偉い。俺を立派な人間に育て上げるために努力して居た」□。今頃（△△？）我子の帰りを淋しく佛の御前に祈りつゝ、清らかな生活をして居られるを想像する。△△さんの母様の姿可眼に浮かんで私は何とも言へない心持可するのです。△△さんのお母さん、体を大切にして待って居て下さい。必ず貴女のお子さんは立派に、そして大きな人間となられて帰って来られるでせう。

〈第一一・一二話〉岐阜縣○○○○○○○○○　一等兵　○○○

〃第一話〃

私達は、チタ洲第六収容所ダヴィンダー第九支所の□より約二十五キロの山中辺境、囚人村落と呼ばれる所に収容せられ、▽▽といふ元少佐を部隊長とし、一千余名の隊を組んで居まし多。部隊長の元副官であった元大尉△△何某と言はれる人は、当時二十六才の青年將校です。將校二十余名の内、名ある部隊長に次ぐ人格者として、大衆よりの尊敬の的であった。敗戦国の捕虜として抑留されゝば將校、下士官、兵の差別なく一重に暗い曇が心を閉し、日常の生活を暗苦に落し入れるのが普通でありましたが、この一指導者の態度、面影は常時不変の光明に輝き一日の労働に空腹と疲労、又精神的打□に滅入らんとする大衆をよく激勵して呉れました。ある時、隊員が農場作業に於て誤ちを犯した時、ソ側より該当者を数日間の営倉に入れんとした時「己の責任だ」と言って、自ら營倉に入るを申入れ、隊員を無事に終られた事、ラーゲリで一番難関と言はれた作業場の隊長として卒先自ら他の將校と交替し、百名近くを卒され、果敢にも当時仕打の孑かったソ側將校、兵隊と戦ひ抜き、隊員の心を休めては己の心を休めず、不足も甚だしい煙草を兵士隊員全体に自分の配給を分配される事、数回、炊事擔当者として責に当られゝば、速坐に大衆の喜びの声を聞く等、物□的に非ず、只々苦しみに呻吟せる部下へ、否お互ひ日本人同志としての苦楽を分ち合ふ

（一行欠か）

まず、將校といふ階級意識を毛頭□□ぞ直に隊員の一人として、兄貴役としての精神は美しくラーゲルの花として、私は忘れる事を知りません。又ソ側將校兵よりも信厚かった事も事実特筆致します。下手に綴った一文は右將校の評價を低めたかも知れませんが私としての粗筆を終ります。

〃第二話〃

同じきラーゲルの美談として、医務室病室患者係の△△と言はれる元兵長さんを御紹介します。最初の冬生活に不馴れ土地、居所、食物になやまされ病人の續出は驚くべき。部隊の五割が受診患者、夕六、七時頃よりの診断は朝の五時迄つゞけられる有様、勿論軍医、他の衛生係も苦勞しましたが、△△さんは身は病弱であり乍ら不眠不休に價する努力をしてゐまし多。翌夏に入り無理重なりて一時臥床の止むなきに至った。彼は未だ患者の心配をして居た程です。何日か経過して起き上った△△さん□再び患者への杖として働き初め、最早入院患者の神さんとまで言はれる程手離し難き人となり、蔭に陽尓努力され、自体は再三、再四の発熱に身を細め乍らも甲斐甲斐しくやられた方です。内地帰還途中、ウーゴリナヤと言う所で全員下車を命ぜられ、二ヶ月余りの作業越つゞけまし多。全員四ケ所に別れ（私達一部はオケアンスキーに）八月上旬に入って、他方へ向けて三百名の作業團が組まれ、一時私達の所に集結して来ました時、「ヤセ」られた△△さんの姿があり、驚きの外無く話に聞くと好くない人（贋民主々義者）、利己的な主張者と病人の事で話合ひ、結果其所を出された様な有様でし多。にも拘らず彼は自身を忘れ、責任を忘れず、約三分の一の病人の世話役として喜で奉仕して居たのです。到着の翌日、彼は四十度以上の熱で未だ頑張らうとして居ます。誤れる指導者は、病人を作業員として出す事、約三割、その中に真の人は身を投して居るかと、当時私は△△さんへの尊敬の念で一杯でし多。医師に制せられて、彼はベッドに身を横たへましたが、それも二、三日患者の□を思はれて起上って居まし多。職に生きる□人としての務めかもしれませんが、彼程獻身的職責精神を発揮して、大衆の爲に盡した人も他に見られない。荒野原に開いた一輪の美しき花として忘れ難い事を確信します。近々當所に上陸されるかと思はれます。彼こそはシベリヤ生活二年の間、終始変らぬ精神の下、大衆の中に敢然として生き、大衆を救って来た人であり、只の大衆の一人として捨て果て難き人であると私は思って居まし多。幸ひこゝに貴班の御募りにより我をも一話を記しました。

〈第一三話〉和歌山縣○○○○○○○○○○○○○○○　○○○○

我等の△△隊長

私はチタから北に汽車で六日程の所、スカワラジノ第六収容所第九分所から更に8キロ程奥地の第10分所に、忘れもせぬ昭和二十年十一月二十日地方人軍属の方を半分以上加えた混成部隊として、分遣になりました。従員五〇〇名、此の地方

は有名な砂金地帯です。此處にソ同盟事業体に依り、圣営される所の鉱山が有ります。此の鉱山を運営する爲に発電所が有り、其の発電機を動かす爲に薪が必要です。沿海洲の一帯は、見事な落葉松の自然林の連續です。此の山で森林伐採をして薪材を切り倒して二、三五ｍに切り更にトラックの着く所に集積します。一本の薪材を四人又は八人位かゝらねば、動かぬ様な大木で□殊に伐採は冬の仕事です。酷寒零□五〇度、内地の皆様には考えられません。私は、此の寒い冬を二度越して参りました。今から申□上げる小隊長、我等の△△隊長は、此のシベリヤで我々の爲に自我を捨てゝ部下を愛して呉れました。自分の功名を少しも考えることなく、少しでも小隊員の身体は無理の行かぬ様細心の注意と努力を惜しみませんでした。ソ側の監督（事業体）との交渉も誠意を以て直に隊員を思ふ熱情に何時も△△隊長の言は克く通りました。人情に変りはありません。私達が此の隊長の下で伐採に行く様になってから二ヶ月三月圣つ中に、ソ側の監督も△△隊長の親心にも勝り隊員を可愛がることが分ったものか、大変親しみと打解けた態度で交渉が行われる様に見えました。併し、ソ聯は何處迚もノルマ（作業量の割当）とパーセンとの國です。随分無理な要求を監督から受けて、一人頭を痛めて居ることも數彡々ありました。隊員に無理な労働を強ふることなく、一人ソ聯人と對抗して相手の氣分を悪くせぬ様、我々との中を取り持つ隊長殿の苦心には全く頭が下りました。これ実に、我々同胞を無事に健全な身体で内地に還してやろうとする努力に外ならなかったのであります。又木を切り倒す際なども、倒れる方向のはっきりせぬ場合などは、附近の作業員全員に避難を命じ、何時も細心な注意をして呉れた爲、長い間の伐採作業中、一人の怪我人もなかったことなど。此れは不断の努力、作業場の隅々迚克く馳せ廻って注意をして呉れた賜です。

我等の慈文

△△隊長殿は將校なるが故に、今も尚シベリヤの地に止まって居ります。私は一足先に内地に帰りました。こんな元気な身体で帰れたのも、実にこうした隊長の下で働らいて居たからです。内地の皆様、シベリヤの山野に労働する我々同胞の労苦を偲び、一日も早く全員帰國出来得る様、努力して下さい。お願ひします。

〈第一四話〉大分縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　〇〇〇方　〇〇〇

ウランデー第一収容所、△△△△（軍医中尉）は、入って以来、約千五百名許り収容人員を一人で擔当し、懸命に頑張られて居りました。彼は、最初から最後迚、学究に忠実で、診断治療尓も決して良い加減なこともせず、終始眞似目にやられたことに対して、誰もが見とめて居ります。併し、口の方は無口の方で、そう上手も云はず、本当に患者の氣持になって、親身も及ばぬ手当をなして助け□□人間は数限無いと思ひます。小生も其の一人、今一歩で死ぬる所を助けて貰った。彼は博士も持って居るか、そんなことは眞面にも出さず、終始一貫眞似目です。眞似目と云ふことばは簡單ですが、自分が見た内で（以下、判読できず）似目と云ふことばは簡單ですが。自分が見た内で足かけ貳ケ年の間、殆ど氣持ちが変らなかった点に敬服します。後になって、ロスケの軍医が二人位見えましたが、眞似目な学究的な△△軍医さんに殆どまかせきるやうな有様でした。患者等が食事のことで困る時には、積極的尓交渉して栄養食をとる様にし、室が悪くて、悪風が入って来た時、すぐその処置を講じ、一日として患者を忘れることはありませんでした。又部下に衛生伍長一人、軍曹一人、曹長一人、居りましたが、是等の人も△△軍医さんの指導に添って、ロスから支給を受ける少ない薬物を大変大切にして有動に使用されて居りました。重症者の病院へ轉入などの時も、頭がさがり、眼頭が厚くなる思ひがしました。決してロスケ丈の附添ひにまかせず、衛生兵をつけて居りました。以上は、自分が抑留間を通して、最も深く感じた自己の職業に生きる人であり、人間愛の最高を行くものと思考します。本人の生れは、三重縣△△と聞いて居ります。

〈第一五話〉石川縣〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　軍曹　〇〇〇〇

□□主計中尉△△△△、この人はブラワク第四八ラーゲルに於ける我々の△△中尉は大隊長でありました。彼が大隊長として、我々のためにソ聯側との困難な交渉に全く寝食を忘れて活躍をして呉れました。總員三百数十名位の小さな収容所で、森林中を我々の手で切り開いて新設されたものでしたから、何もかもが全く不自由の連續でした。道が悪いため、雨でも降れば、その日の食糧も遅れることもありました。又水が近くになくて、そのため炊事に事をかくこともありました。初めのソ聯の所長は剛頑な男で、我々のために必要なる何事も積極的に世話をして呉れる事もなく、只「作業」「能率」で以て、日本人を酷使せんとするのでしたが、彼△△中尉は、不自由な露語を以て、彼に対し必要なる要求をなし、或は給与に、又作業の実施についてその職責とは云ひ更ら、我々部下を少しでも楽をする様に護って呉れたことは、全員の感激の的でした。冬に零下数十度中の作業は困難を極め、とても「ソ側」の要求□る量□完遂□□□は出来ませんでした。そして時々は、所長の命により夜間作業を命ぜられることもあったのです。こんなとき、彼は「ソ側」に対し、能率不良のあらゆる原因を陳べ、夜間作業免除に

努力して呉れました。そして、どうしても聞き入れぬときは、我々と共に丸太を運搬して呉れるのでした。

昭和二十一年九月十日だったと思ひます。未だ収容所が出来て一ヶ月位にしかならぬため、兵舎は不完備で、白樺の枝で壁を編み、松の皮で屋根をふいた兵舎内で、我々は生活してゐました。九月と云へば、シベリヤの山林は内地の晩秋の氣候です。その朝は初雪を見る様な寒さでした。然し我々は、作業に遂はれて自分の宿舎も完備する暇もありません。「ソ側」は、火際防止と称して、火氣の使用を許しません。そして、遂に此に十日沸暁、火災を発して兵舎は全焼、即死三名、入院三十数名（内十三名死亡）を出す大惨事を起しました。原場に於ても、彼は火だるまになり、漸く逃れ出て来る兵隊を助けるため、火の子の中を水をかぶって、何人かを入口まで引きずりに行く姿は、單なる指揮者と兵隊の情を超えるものがありました。然し、その後彼の活動は、更に重大なものがあったのです。而論、所長はその責任を我々の上にかぶせんとして来ました。全く我々兵隊の責任に歸されても、我々の境遇としては、如何とも出来ない実情だったのです。それと彼、△△中尉は総ゆる陳述と辨護により、我々兵隊の規則違反と、怠慢に依る過失を必然的なものとして、ソ聯所長の我々に対する待遇の不良（兵舎の不備作業の過度に依る疲労等）のせいに押しつけてしまったのです。そして、幾十日の何回かに渉るソ側政治部員の取調べの後、遂に我々日本側からは一名の罪人も出すことなく、ソ側の所長は左遷されて出て行ってしまいました。此の間、全く我々の心配は大変でした。責任者の幾人かは、當然刑によりて處せられるべきだったものを、一人の犠牲者も出ずに終ったのです。紙面が許さぬので筆をおきますが、我々の喜びは全く言語に絶するものでした。御想像下さい

〈第一六話〉北海道〇〇〇〇〇〇〇〇〇　〇〇〇

春が何時来て何時去って行ったのか、春が去って何時夏が来たのか、考へる暇もなく、破れし軍衣尓身□包み、ソ軍の強い要求の作業をし、雨の日風の日、零下五〇度、六〇度の猛吹雪に、無言で涙を飲んで點々として働いたのは何の望みあってか。それは、只々祖國の土を踏み、父母妻子と再會致すと言う希望以外に外なりません。今尚、シベリヤの奥地で、我等の同胞五〇万余が重労に努んで居ります。その一美談として、ソ聯陸病の出来事を書きます。二月の大吹雪の夜、八キロ程もある収容所から一人の患者を擔架にて護送致して来ました。ソ聯女醫の診断で内科病室に来ました患者は大分重体ですが、カンフル注射だけ致して帰ってしまった当直の看護婦は、二三時間始に来るが、何の手當も致さなければ命も致しません。當病室勤務、△△△君（北海道二十三才）は、早くも急性肺炎なる事を見抜き、看護婦と女醫の目を隠れて一夜一睡もせず、温濕布を行った。然し此れが看護婦、又ハドクトルに発見せられたならば、彼は二日の絶食の罪になります。彼は幾度か前項の事件で絶食致して居ります。彼の眞の若き情熱の看護に依り、生命を取返した者は幾人もあります。肺炎患者の看護で、彼の身体は綿の様に疲れてゐました。その時、又も作業班収容所依り、打撲患者が入院致して来ましたが、出血多量の爲、輸血を致す事になりました。彼は自己の疲れ切った身体も省みづ、ドクトルの前に出て俺の血を取って助けてくれと言った。此の時こそはドクトルも胸を打たれてか、無言のまゝ彼の顔を瞳めて居りました。彼の尊い血の一滴に依り、患者の生命を取止る事が出来ました。彼こそは、シベリヤの地にての偉人でなくてなんでありませう。常に彼は曰く「俺は、同胞が完全に祖國へ帰還致す迄は、一人でも尋く死に去らしめぬ様努力致すぞ」。今、私は祖國の地を踏んだ嬉びに、目に閉じれば、彼の溌剌たる姿が目に見えます。

〈第一七話〉愛媛縣〇〇〇〇〇〇　〇〇〇〇

在ソ二年、それは全く飢えと嚴寒と重労の生活であった。その生活は、私達の身体を見る間に、内地では見受けることの出来ない栄養失調を来たし、見る影も無し。やせ衰えた身体にして終ったその結果、活動力は奪はれ、幾多の病魔が発生して入院する者は数限りなく現はれて来た。二十一年の一、二、三月には、一日三人平均の死亡者が出た。これも栄養と完備せる醫具藥があれば、当然回復出来得る患者が次ぎ次ぎと倒れていった。榮養失調者は、隣りに寝て居る者も氣付かぬ中に寝るが如く死んで行った。結核病者は、見るも痛ましい程にやせ細って日干しの如くなって死んで行った。これを見たムーリ第二〇九九陸軍病院の同胞は、自らの衰へた体力にもかかはらず重患を救へ、同胞を殺すなと、この難局打破の策として千金否、自らの生命力にも影響する血を患者に与へんと企だてた。ソ側軍医は、最初その熱意を冷やかな目を以て受け入れようとしなかった。日々「到底駄目な者は駄目だと」。併し、我々には、何人でも次から次からと倒れゆく同胞をみすみす見すてゝ置かれようか。日本軍医「△△△（千葉医大）」博士の決断により、最初の輸血は行はれた。患者は日増しに回復した。我々はそれを見て、よしこれだやろう。我等の血をと、輸血班は組織され、倒れゆく同胞を少しでも救はんと、とぼしい体力の中で同胞愛に満ちた美しい花は今も寒い淋しいシベリヤの地に美しく輝かしく咲いてゐる。その甲斐あって、無駄に死に行く同胞は、次第に減少の一途をたどって、歸國を一日千秋の思ひで待つ、明るい病院となっ

て来た。輸血者は、ソ則も認めて、その礼としてパン二〇〇瓦砂糖二〇〇瓦、バター二〇〇瓦、米□□□瓦を与へられてゐる。

〈第一八話〉〈京都府〉〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　伍長　〇〇〇

戰に敗れればどの様な目に逢はねばならぬかは、私は大体想像してゐました。然し、それは浅い見くびった考へ方でありました。先づ、我々は経驗した事のない嚴寒と、言葉通ぜぬソ聯兵士と、乏しき食生活の戰ひでした。或る時は、フレープ（野草）の実を四十名の人員にて宝さがしにも似た採集で、一日にボーチカ（大樽）一杯になる迫パンも食はさず、山をさがし歩かされた。又石積（断層の部分より石を取り積み並べる）作業に於て、唯一□歩哨の悪意により、冷雨の中に揮迫ぬれる迫焚火一つ許されず作業さゝれたこともありました。こんな時に、何時も先頭に立って、自ら歩哨の言ふ儘に馬鹿にされ乍らも、朗らかに冗談の一つも言ひ乍ら、我等の氣持を引き立て歸る迫は、是が非でも身体だけは大事にして頑張らう。その内に味噌汁も澤庵も喰べられるよと、笑ひ乍ら皆と一緒に石も割れば崖もくずす、私の小隊長△△△△少尉（兵庫縣△△△△△△△△出身）の行動は、我々収容所の花であり、ともすればすさび勝ちなる兵隊の氣持を明るく引き立てゝ下さった。若い丸顔のあどけない顔、特別食を食って將校だけは太り、我々を戰前同様に憎使するのだと云ふ兵隊間の不滿も、我が小隊だけには通用せず、又△△少尉だけは、部隊全兵士も例外にしてゐた程だった。夢に幾度も見た祖國に歸って、二年ぶりに鉛筆をとり、まとまったことも書けず、くはしきその時の状態は、後日知らせ出来る日もあろうと思ひまして簡單に記しました。

〈第一九話〉〈長崎県〉〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇　一等兵　〇〇〇〇

敗戰の軍隊程、混乱状態になりやすいものはない。あの武裝解除を受けてさしもの精強を誇った関東軍が虜囚生活を一ヶ月二ヶ月と送る内に、將校下士官の ﾌ くは兵を良い食い物にし、自らは本部に悠々と寢そべるのを當前の如く考へ、兵は又それを半ばあきらめた陰惨な収容所生活の内え、ホルモリー地區二〇五分所（以前二〇五の主計係▽▽少尉、△△中尉の如きは、眞に異國にありて同じ日本人の爲自らを犠牲にした人と云っても過言ではなかろう。当時、同分所は給養、其の他が恵まれず収容所側のソ聯將校も流刑の者である爲、捕虜に支給すべき糧秣被服の員數をはねてこれを持ち歸ることは珍しくなかった。又炊事関係の者がおのれのみ滿腹し、苦しい作業をやってゐる同胞をかへり見ない。前記△△中尉は、毎食事揚□の度に炊事に行って、分配の状態を監視し、又糧秣の横流れを予防した。これがため、わずらはしく思ってソ側將校と結タクした炊事関係の者は、所長に△△中尉排せき運動をなし、中尉を下番させ、尚かつ他の分所へ転属させた。▽▽少尉の如きは、ソ聯側に対して余りにも強い態度に出た爲、所長より転属させられる時等は、それまで着用の將校の軍衣袴を脱がせ、ボロボロの兵の服を着用させ、白紙一枚もたせず又名簿に「この男は物を取るくせがある」と記入したそうである。かゝることになることになるのを、充分承知の上でかんぜん収容所に對抗し、同胞の爲め盡した二名の方に故國より感謝をさゝげます

〈第二〇話〉長崎縣〇〇〇〇〇〇〇　上等兵　〇〇〇〇

魔の密林に果す責任感

ハバロフスク地區に□ーリンと言ふ所がある。そこにある三〇四収容所の△△△△君が死生を彷徨しつゝも美事責任を果した事実物語である。△△君は、三級（体位）の身で葱採取に同僚二〇名と共に命によって密林に入った。その密林は、ソ聯同盟人さへ行方不明になることは珍らしくない密林で、而も熊などの猛獣さへゐる、恐るべき森林である。葱と言っても、内地のそれと異りスズランの葉に似たようなもので、長さが大きいので三〇糎位、幅三四糎余のもので、然し香と味は内地の葱その儘で、無害で且美味である。葱採取の△△君は、その大森林で遂に一名はぐれてしまった。夕方になり、他の一九名は歸還したが、彼は杳として行方不明、同僚も心配して探したものの発見出来ず。彼一名を残して帰還したわけである。遂にその夜は、同僚十九名とソ同盟の兵が一緒になって密林を捜索したが、△△君を見出すことは出来なかった……。そして、その日から三日目、ソ同盟兵によりナナエソ族といふ東洋系の種類の住む或小部落に、彼が辿りつき保護されてゐることが発見された。而もその際、△△君はマワタイ一パイ詰めた葱を手離さず所持してゐた。彼が弱い三級の身で、恐しい猛獣までゐる大密林の夜をさすらひつゝも、ノルマの葱の重たい袋をかついで所持してゐたと云ふことが、日本人の同胞ばかりでなく、ソ聯同盟の人にも感激を与へ、彼は他の模範とばかり賞揚され、賞を与へられた。逆境にありても断呼と果すその責任感、その強い意志、この美しさこそ日本人の誇りであり、又日本再建の礎石でなくてなんであろう。我々は誇を以て、この話を御紹介した次第である。